

丹波市男女共同参画センターだより

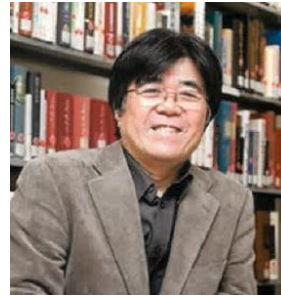
次代への「跳躍台」 -良妻賢母とジェンダー平等-

「ジェンダー平等」が2021年の流行語大賞にノミネートされた。「わきまえない女」や「オリンピック」など、昨夏の五輪にまつわる幾多の騒動が付け火したのか、と思うといささか寂しい気もする。

家事や育児・介護が、人類発祥より女性本来の役割だと思い込んでいる人は少なくない。私も多分にそうした類だったが、この10数年来関わってきた男性介護者のネットワークに、この考えを厳しくただされた。対象が男性で、ネットワーク発足の日が国際女性デー(3月8日)だったことから、いやが応でもこの課題に向き合うこととなった。

そして、知る事となった。江戸時代には男性に介護の全責任があったこと。責任だけでなく介護の実務も担っていたこと。武士には「看病断」等と称する休業制度も整備されていたこと。介護は優先される大事な家族の営みであったこと等々。その後、明治の「富国強兵」と「良妻賢母」という国策を経て、育児や介護が女性専業として規範化した。

しかし、この「良妻賢母」、いまでこそカビの生えた古くさい教えとしていちべつもされない扱いだ、江戸から明治の移行期の目線で見れ



津止 正敏

男性介護者と支援者の全国ネットワーク 事務局長
立命館大学産業社会学部
特任教授

ば全く違った景色となる。それまで何ら責任能力のない「イエ」の付属物と扱われてきた女性たちにとっては、妻と母という限られた枠組みではあったが、社会参加に向かう強力な跳躍台ともなったのだ。

この教えは女子の進学の大義名分ともなって、上級学校への進学率向上にも大いに貢献した。女子の近代化は良妻賢母とともに始まったというほどに、実に革命的だった。明治が閉じてもう100年、良妻賢母はとっくにその役を終えた。

さて、と考えた。21世紀のいま、次代への飛躍を先導する新たな教えは何だろう。冒頭で触れた「ジェンダー平等」がその大役を担うに相応しいのではないかと、思いを膨らませた。主たる介護者の3人に1人が男性、その数、優に100万人を超えるこの時代だからこそ、この「ジェンダー平等」の思想が特に意味ある跳躍台となるのではないかと。そして、今度は男女がともに手を取り合い、介護のある暮らしを社会の標準とするためのジャンパーとなって空高く飛んでみたいものだ。新しく生まれたものが成長するという

みずのえとら
壬寅の年の誓いである。

(寄稿：令和4年1月)

